

### ごあいさつ

滋賀大学経済学部の母体となった彦根高等商業学校(彦根高商。1923年～1944年)では、研究や教育に活用するため、同時代の新聞を収集していました。それらのなかには『大阪朝日新聞』や『大阪毎日新聞』などがあり、現在、滋賀大学経済経営研究所で保管されています。

『大阪朝日新聞』と『大阪毎日新聞』には滋賀についての情報があつめた紙面があり、1928年～1937年の原紙については、滋賀県にある公立図書館での所蔵はなく、本研究所にのみ保管されています。

そこで今回、滋賀県内ではあまりみることができない、新聞原紙に掲載された彦根高商をめぐる記事を3期にわけて展示します。

おおよそ80～90年前の滋賀の人々が読んだ新聞原紙をとおして、彦根高商の様子をみてみましょう。

2017年8月

### しんぶん紙 ー第Ⅱ期の概要ー

第Ⅱ期は1930年～1933年の新聞原紙から彦根高商と地域との繋がりが捉えられる記事をご紹介します。また、展示している新聞原紙には日焼けや調査に活用された跡が残っています。そのような新聞原紙がもつ歴史も、彦根高商の報道とあわせてご覧ください。

# 企画展

# 【しんぶんし】

原紙にみる彦根高商報道

## 第Ⅱ期展示

〈1930年1月～1933年12月発行分〉



※彦根高商卒業アルバムの写真はすべて滋賀大学経済経営研究所デジタルアーカイブです。

〔表紙写真〕『大阪朝日新聞』一九三七年五月八日

発行 二〇一七年十一月六日

The Institute for Economic and Business Research  
http://www.biwako.s.higa-u.ac.jp/eml/index.htm



〒522-1852  
滋賀県彦根市馬場一丁目一  
電話：0749(27)1047  
FAX：0749(27)1397

監修・編集 発行  
滋賀大学経済経営研究所  
今井綾乃 (滋賀大学大学院経済学  
研究科博士後期課程)

会期  
◎第Ⅰ期  
2017年8月1日(火)から  
10月27日(金)まで  
◎第Ⅱ期  
2017年11月6日(月)から  
2018年1月26日(金)まで  
◎第Ⅲ期  
2018年2月1日(木)から  
3月30日(金)まで



企画展【しんぶんし】  
原紙にみる彦根高商報道





「彦根繁栄の道しるべとして廿三日午後六時より百三十三銀行樓上で『彦根町繁栄策座談会』を本社大津支局の催しで開いた、参集せられた人々は何れも町の有力者で極めて熱心に意見を述べられ予定の時刻を過ぎるも、なお尽きず漸く十一時に至って散会した」

『大阪毎日新聞』『滋賀毎日』5面 1930年6月25日

### 【しんぶんから知る① 彦根高商と地域との相乗効果】

この新聞は「彦根町繁栄策座談会」について報じています。記事によると、座談会には彦根高商の2代目校長である矢野貫城や彦根町長らが参加しました。

座談会で参加者は彦根の経済発展や環境整備について話し合いました。教育問題に話が及ぶと、彦根町長は彦根高商の実施する調査

や講演等が彦根住民の教育向上に寄与していると語りました。また、矢野校長は彦根住民の優しさや風紀の良さが彦根高商に好ましい影響を与えていると話しました。

彦根高商と地域は互いの存在によってそれぞれに恩恵を得ていたようです。

### 彦根町 発展座談会 百貨店の進出には 資本合同で対抗

……揃った各種の機関で もっと発展を期したい……

**平塚** 百貨店の進出には彦根も苦しんでいます、これが徹底的防止は困難であります。土地の資本家が集まってここに進出して来る百貨店程度の設備をして対抗することが一番理屈にかなっていると思います。資本関係も人口二万五千程度のものにすれば何とか出来るでしょう、三越の進出も、結局その人口を目標としてのことだから人口を基礎としてこちらでも考えるんですな、また土地の小売商が利潤についても考えることが大事だ、そうすればいくら三越の商標がねうちがあるか知らぬが結局購買者は彼等から去り、安い土地の商店が繁盛する、これにつき過日の全国町村長会で話が出たんですが、百貨店の進出に課税するんです、これは売上高によるのと売店所用敷地に対して課税する二つの方法があるが仲々むづかしい、現在の対策は感情的に流れている、まあ適当な資本合同で対抗するんですな

**矢野** 百貨店の地方進出防止案としての課税も駄目ですな、外国の例から見ても、これに対して百貨店側は支店を作るとかチェーン・ストアを作るとか、これを免れる方法を講じているし手のつけようがないのです、都会集中の潮流に対し農村の青年子女を田園に閉ちこめ得ないと同様の時代的な強さが流れていますただ町長のいわれるように資本合同などで対抗するより道がないでしょう

**平塚** 彦根は学校教育で進んでいるが、一歩を進めて社会教育を盛んにするんですな、町民の公私生活に紳士の教養を積みしめ、優秀な町民が出来てゆけば自然に内から発展の力が湧き出ると思っています、この点から図書館、講演会等に力をつくしています

**橋本** 彦根の教育問題が出ましたが、校長さんの御意見は……

**矢野** 教育にはよい処です、今の専門学校高等学校は大学と違って田舎にある方がよいと思っと思っています、動播期にある学生に悪性の刺激が薄く町民が親切にしてやってくれます、この点から彦根はよいと思っっています、その上彦根は自然的に美しい城と湖を持ち町の風紀が非常によい所ですから、外国の状態から見てもこのくらいのが教育都市として最適当です、町長の補習教育に尽力されるのは非常によいことで、私も商工的補習教育の主張者です、このやり方についても効果的でなければなりません、彦根はあんな立派な図書館を持ち社会教育も出来まので結構です

**平塚** この点では高商が出来て非常に利益を得ています、調査講演などで町の教育上非常に恩恵を受けています、高商を彦根に作ることになつたときは大津と非常に競争し、大津より沢山の金が出来てここに作られました、その当時寄付を集めるのに、苦心しました、その折、過日世界金満家番附に入った人の所へたのんで行ったところ「彦根などに高商をおくのは大反対だ、高商生は商人になるのだ、見るものも聞

くのも皆実習だ、この点から大都会におくべきだ、彦根へ高等学校をおくというのなら何だけれど」と叱られました、結局三万円出してもらいました、彦根は高商を貰うことが出来て大いによろこびました、なお彦根城は彦根の文化と精神の中心地であり遊覧の中心地であるべきでしょうが、井伊家のものですし、楽々園、玄宮園も町が五年間一期として井伊家から借り受けこれを安く貸しているのです、これは町で借りているから経費その他が安く行けるのです、これに対し大衆を引きつけるように努めて遊覧的施設が出来たらと思っっています、自由にはありません、この附近には県の水産試験場、測候所もあり機関が揃っています、もっとこれ等によって町の発展を期したいと思っっています

- 出席者(イロハ順)
- 百十三銀行常務取締役 外村米吉氏
  - 滋賀県水産試験場長 田口長治郎氏
  - 彦根測候所長 筒井百平氏
  - 宇治川電機近江支店長近江鉄道株式会社常務取締役 的場順一郎氏
  - 彦根聖愛教育 シイ・スミス夫人
  - 彦根高等商業学校 矢野貫城氏
  - 彦根町長 平塚分四郎氏
  - 彦根実業協会副会長 廣野規矩太郎氏
- 【本社側】
- 内國通信部副部長 根木久治氏
  - 販売部助役 中野美樹氏
  - 同 中坪八重蔵氏
  - 大津支局長 橋本豊次郎氏
  - 彦根通信所主任 前川眞造氏
  - 大津支局長 田中香苗氏

『大阪毎日新聞』『滋賀毎日』9面 1930年6月26日

### COSMOPOLITAN 新渡戸博士を迎ふ

九月廿一日午後一時より本校講堂に新渡戸博士を迎へた。七十歳を越えた人とは思はれぬ若々しい博士は「現代青年の前途」なる題の下で悠々とした静な調子で一時間半に渡つて、自己の体験を交へつゝ語られたすなはち、現代の青年は將來の日本の國際的發展のため、從來日本人をミリタントと誤れる西洋諸國に眞の日本を知らしむべきであると言ひ、現代の青年に必要にして而も失はれ居るものこそ、パイオニアリアンスピリットと、パーソナルハイモニーなりとし、その如何に重要なかを語り、更に日本人に乏しき「世界を見渡す眼」の養成につとめざるべからざる所以を講じかくすれば現代青年の前途は多望洋々たるものであると結論し國際聯盟に論及して終つた。

▲『彦根高商学報』第36号 1931年9月30日発行 経済経営研究所デジタルアーカイブ

### 挙校一致して 近江商人の研究に!

◆……近江商人の根據地に位置する我が校では從來その研究には多大の力が用ひられてゐたが、今度益この研究を進め以て我が校の一特色とせんと議成り、菅野、大橋、原田、太刀川四先生を中心にその方面への活動の手が伸された。

◆……即ちこの休暇を利用して近江出身の生徒に分擔調査が課せられた。やがて来る開校五週年紀念日には近江商人に關する研究發表がある筈であるから、その日には生徒諸君の手によつて數々の新発見がもたらされる。

だらうと思はれる。

◆……尙縣當局でもこれが研究には大いに乘氣になつてゐるさうだからやがては近江商人會館も建設される様な話である。而して勿論それは彦根に來るべきであるが或ひは本校内に設置されるに至るやも知れぬ、と菅野先生の鼻息は荒い。

◆……之が研究の好資料を御發見の先輩諸氏並びに學生諸君はドン／＼研究部迄御提供あつて學校の特色たるべき此事業の完成に助力していただきたいものです。

▲『彦根高商学報』第12号 1928年7月25日発行 経済経営研究所デジタルアーカイブ



# 秀才を埋れ木にせぬようにと高商の心尽し

彦根高商校では素質のよい生徒の中で学資の乏しい者を救済のためさきに九名を授業料免除生にしたが財界不況の余波をうけ学資に窮する生徒がますます多くなる傾向にあるので校当局は文部省の認可を得、二十二日さらに三名の免除生を選抜するとともに家庭教師そのほかいろいろな方面へ周旋し学資捻出の途を積極的に講じたり或いは育英会の援助をうけさせるなどして秀才を埋れ木にせぬよう努めている

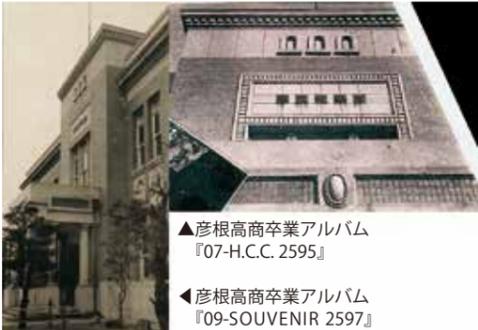
『大阪毎日新聞』「滋賀毎日」13面  
1930年9月28日

# 高商生徒の歓迎迎会を開催

「今後のため」を狙う  
彦根町の新試み

彦根町当局では各地方から集まっている彦根高商生徒に彦根城下のよき印象を植えつけやがて卒業後各第一回に活躍の際彦根を宣伝するパイロットになって貰うため本年から新しい試みとして同校生徒の送迎会を催すこととなり十一日卒業式の後午後二時から町役場楼上で卒業生全部を招待して送別茶話会を催しなお四月十一日には新入学生の歓迎会を開くことになっている

『大阪朝日新聞』「滋賀版」5面  
1933年3月11日



▲彦根高商卒業アルバム『07-H.C.C. 2595』  
▲彦根高商卒業アルバム『09-SOUVENIR 2597』

# 町紹介のために

## 旅館のサーブイス

受験生を優遇する彦根

彦根高商では十九日から試験陣を展開するため十八日には全国から押寄せる九百余名の受験生郡で彦根町は混雑し一年中の書入時とする彦根宿屋組合では従来受験生の多くは学校附近の宿屋へ泊り不平を叫んだ表情にかんがみ今年はその不平を一掃するとともに彦根紹介のためにも大いに優遇すべく各旅館の宿泊賃を二円二十銭と一円八十銭一づれも昼弁当つき(玄宮園、楽々園のみは二円七十銭一昼弁当なし)に協定、十八日は組合役員が自動車用意の花やかな歓迎陣を敷き各旅館へそれぞれ割当て、遠方の旅館へはロハ自動車を送りつけさらに試験中も毎朝ロハ自動車学校へ送り届けることに決定したなど受験生さまさまのサーブイスに宿屋組合の腕により(〇〇)をかけるが今年も受験生も激増したところへ試験期日中に祭日があり一日多く泊るため各旅館はホクホクもので十八日から四日間は彦根全町の旅館は受験生郡が占拠する

『大阪毎日新聞』「滋賀版」5面  
1933年3月18日



▲『大阪朝日新聞』「滋賀版」5面  
1932年3月15日

# 受験生の引張合ひ

高商人學試験初まり各宿屋

入學試験者九百六十八名の多きに選んだ彦根高商の入学試験は、いよいよ十九日、廿二の三日間にわたり行われるため各宿屋地から賑をどらせて受験生を歓迎する

『大阪朝日新聞』「滋賀版」9面  
1930年3月18日

# 食費不払の高商生と戦う

## 彦根の食堂組合

彦根高商生の食費不払に苦しむ同校附近の食堂十二軒が不払高商生をロック・アウトするために結成した食堂組合では単に学校附近の食堂だけでは力弱いため彦根全町の食堂をこれに加盟させて合法的に不払高商生に対抗すべく十三日總會を開きこれが具体的方法を協議するが全町の食堂がこの新商戦術により共同戦線を開いた場合は一部高商生の恐慌時代が現出だといわれ成行きを興味視されている

『大阪毎日新聞』「滋賀版」13面  
1931年5月10日



▲彦根高商卒業アルバム『07-H.C.C. 2595』



▲彦根高商卒業アルバム『07-H.C.C. 2595』



▲彦根高商卒業アルバム『06-LA MEMORIA 1933』

# 高商に共済會

彦根高商生には不景気の犠牲となり退学するものや、學費に悩むもの相當あるためそれら不遇な學友を救済する機關として今回共済會を設立し矢野校長、各教授、職員生徒らが毎月十錢づつ、繰出して救済資金にあて、そのほか苦學に適當な職業および下宿先などの物色斡旋や卒業生の就職斡旋にも積極的活動をなし共済會を中心に生徒間の共存共榮の實をあげることになった

『大阪毎日新聞』「滋賀版」9面  
1931年2月5日

# 學資不足の學生に金を貸與

彦根高商では向學心に燃えながら貧困のため中途に挫折の止むなきに至る氣の毒な學生を救済すべく起ち本年度から積極的に授業料免除の恩典を興へる範圍を擴大し、人材養成の道を開き機會均等を實現する方針に決定調査中だが約二十名以上に達する見込である、また一方職員生徒をもつて組織させる同校共済會を一層活動させ學資不足に悩む學生に一ヶ月七、八百圓を限度として貸與するほか家庭教師その他就職斡旋を行ふことになった、右につき矢野同校長は「貧困學生の救済方法は従来微温的にも講じてゐるが近來不況の影響も手傳ひ學資不足のため可憐有爲の青年學徒が學業を繼續

『大阪朝日新聞』「滋賀版」13面  
1930年4月20日



# —1930年～1933年の彦根高商—

当時、日本経済は深刻な不況に見舞われていました。その影響は彦根高商にも及びました。ここに展示している新聞は、彦根高商が生徒の学資を援助したり、就職先を確保したりする様子を報じています。



▲彦根高商学報」第32号  
1931年5月5日発行  
経済経営研究所デジタルアーカイブ

**琵琶湖新聞** 1873年3月創刊●●1875年7月休刊、同年12月廃刊  
**滋賀新聞** (木版)1872年10月創刊●●1881年2月休刊のち廃刊  
**淡海新報** 1878年4月創刊●●1881年廃刊  
**淡海日報** 1881年2月創刊●●同年5月『江越日報』と改称  
**江越日報** 1881年5月創刊●●1882年12月廃刊  
**近江共同新聞** 1884年6月創刊●●1888年5月廃刊  
**ささ浪新聞** 1888年4月創刊●●?年廃刊  
**京都滋賀新報** 1882年8月のち『中外電報』と改称、さらに『日出新聞』と改称  
**湖南日報**  
**淡海民報**  
**江州商業新報**

**滋賀日出新聞**<sup>①</sup> 1904～05年頃創刊●●?年廃刊  
**滋賀日報**<sup>①</sup> 1904～05年頃創刊●●?年廃刊  
**長等新報** 1904～05年頃創刊●●?年廃刊  
**近江新報** 1889年2月創刊●●1939年8月廃刊  
**江州日日新聞** 1921年11月創刊●●1940年8月新聞統合で『近江  
**日刊大津新聞** ?年創刊●●1940年8月新聞統合で『近江  
**滋賀日日通信** ?年創刊●●1940年8月新聞統合で『近江  
**滋賀日出新聞**<sup>②</sup> ?年創刊●●1940年8月新聞統合で『近江  
**近江日日新聞** ?年創刊●●1939年8月廃刊●●1940年8  
**近江同盟新聞** ?年創刊●●1942年8月第2次新聞統合  
**滋賀新聞** ●1942年8月『近江日日新聞』

**京都新聞(滋賀版)** 1942年『京都日日新聞』と『  
**大阪朝日新聞(滋賀版)** 1925年4月1日「京都滋賀版」 1927年10月「滋賀版」独立 1940年9月より『朝日  
**大阪毎日新聞(滋賀版)** 1894年4月20日「京都滋賀付録」— 1930年10月「滋賀版」 1940年6月大津支局設  
**中部日本新聞(滋賀版)** 1942年9月大津支局設立  
**大阪時事新報** 1940年6月大津支局設立 19

**近江毎夕新聞** 1929年?月創刊●●2016年12月廃刊

**滋賀タイムス** 1951年6月創刊●●『滋賀日日新聞』に改組  
**江州公論**  
**滋賀朝日**  
**淡海時報**  
**滋賀民声**  
**新江州新聞**  
**滋賀日報**<sup>②</sup>  
**近江新聞**  
**滋賀報知新聞** 1954年8月創刊●●

**朝日新聞(滋賀版)** 1940年9月創刊●●  
**毎日新聞(滋賀版)** 1943年1月創刊●●  
**読売新聞(滋賀版)** 1946年4月大津通信部設  
**サンケイ新聞のち** **産経新聞(滋賀版)** 1945年?月創刊●●  
**中日新聞(滋賀版)** 1965年1月創刊●●  
**しが彦根新聞** 1985年4月創刊●●  
**滋賀夕刊新聞** 1959年9月創刊●●  
**彦根タイムス** 1976年12月創刊●●  
**彦根文化新聞** 1974年5月創刊●●

1923年彦根高等商業学校開校 1944年4月彦根経済専門 学校と改称 1949年5月滋賀大学創立

**参考文献**

『滋賀県史』昭和編第1巻概説編(1986年8月1日) 滋賀県発行  
『滋賀県史』昭和編第6巻教育文化編(1985年5月30日) 滋賀県発行  
『新修大津市史』第5巻近代(1982年7月18日) 大津市役所発行  
『新修彦根市史』第4巻通史編現代(2015年1月31日) 彦根市発行

『彦根市史』下冊(1964年3月30日) 彦根市役所発行  
『毎日新聞百年史』(1972年2月21日) 毎日新聞社発行  
『朝日新聞社史』資料編(1995年1月25日) 朝日新聞社  
「朝日新聞(大阪) マイクロフィルム」大阪朝日新聞京都  
発行  
付録、京都滋賀版、滋賀版

『読売新聞百年史』資料・年表(1976年11月2日) 読売新聞社発行  
『中日新聞創業百年史』(1987年8月28日) 中日新聞社発行

# 【しんぶん史 —新聞展開図—】

ここでは、いままで滋賀で流通した新聞の歴史を紹介します。しばしば、滋賀は地方新聞が根付かないところといわれています。いくつもの地方新聞が創刊、廃刊、統合されていった様子を「滋賀の新聞展開図」から捉えることができます。

『大阪朝日新聞』には1925年4月から「京都滋賀版」という紙面が、  
『大阪毎日新聞』には1894年4月から「京都滋賀附録」という紙

面がみられるようになりました。それらは滋賀の出来事にも焦点をあわせ報道する紙面であり、現在、わたしたちのみる「滋賀版」に続いていると考えられます。

現在も発行されている新聞  
※新聞紙名①と②は異なる。